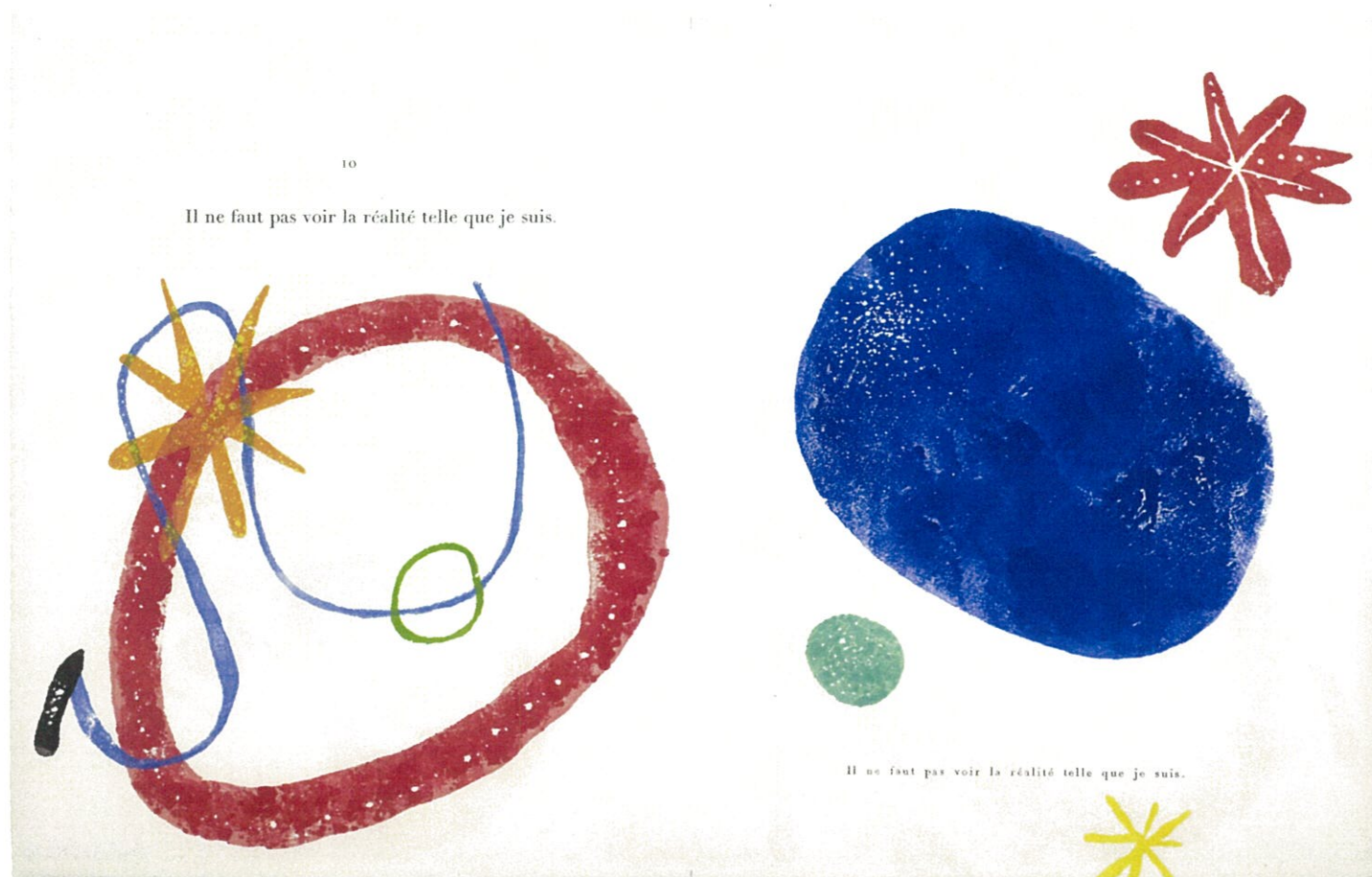


〈ポーラ美術館 展覧会案内〉

シャガール、マティス、ミロ、ダリの挿絵本



紙 宇宙の 片

めくるめく、
「絵画」と「書物」の
出逢い—

Artists Books

by 20th Century Masters

2014.9.21(日) — 2015.3.29(日)

開催趣旨

画家たちは絵筆を手に、絵画のなかにひとつの世界を出現させます。絵画は壁にかけられ、しばしば窓のような存在として眺められます。そのような絵画を描く画家たちの多くが抱いた夢があります。それは、より身近に絵画と向き合える作品を作ることです。手に触れ、幾枚もの絵画を自由に広げて鑑賞することができる、コンパクトなかたち―「本」の制作です。

20世紀絵画において冒険を試みたシャガール、マティス、ミロ、ダリをはじめとする画家たちは、版画の技法による、豪華な挿絵本の制作にも取り組んでいます。19世紀末から20世紀中盤にかけて成熟を極めたさまざまな版画の技法を活かし、物語や詩、もしくは言葉の断片と響きあうように、無数の紙片により広がるイメージの宇宙が生み出されました。

本展覧会では、ポーラ美術館のコレクションの中から挿絵本の黄金期にきらめく代表作をひもとき、初公開の挿絵を含む51点の挿絵本と、関連する絵画作品をご紹介します。めくるめく、「絵画」と「書物」の出会いをご堪能ください。

開催概要

【展覧会名】 紙片の宇宙 シャガール、マティス、ミロ、ダリの挿絵本

【会 期】 2014年9月21日（日）― 2015年3月29日（日）
（会期中無休、ただし2015年1月21日（水）は休室）

【開館時間】 9：00～17：00 （最終入館は16：30）

【会 場】 ポーラ美術館 展示室1・3（神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285）

Tel： 0460-84-2111 / Fax： 0460-84-3108

HP： <http://www.pola-museum.or.jp>

【出品点数】 挿絵本51点、油彩画・水彩画・パステル画など約30点、彫刻1点

【出品作家】 エドガー・ドガ、アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック、ピエール・ラプラード、ラウル・デュフィ、ジュール・パスキン、レオナルド・フジタ（藤田嗣治）、マリー・ローランサン、マルク・シャガール、ジョルジュ・ルオー、アンドレ・ドラク、アリストイド・マイヨール、パブロ・ピカソ、アンリ・マティス、フェルナン・レジェ、ジョルジュ・ブラック、ジョアン・ミロ、サルバドール・ダリ

【入館料】

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生(土曜日無料)	700円	500円

本展覧会のみどころ

20世紀美術の巨匠たちと文学 — 「絵画」と「書物」

貴重な挿絵本、約50冊を一挙に公開。ポーラ美術館のコレクションから、20世紀の巨匠たちの版画による挿絵本制作の試みを初めて概観する企画展です。画家たちが文学と対話し、書物を舞台としてテキストとイメージを個性豊かに融合させて紡ぎだした、紙上の総合芸術一紙片の宇宙をお楽しみ下さい。

「芸術家による挿絵本」とは — 古き良きフランスの愛書文化

Q. いつの時代のもの？ 現代でも制作されているの？

「芸術家による挿絵本」（リーヴル・ダルティスト）は、フランスで19世紀末から20世紀中盤にかけて隆盛した版画の出版物です。美術作品の普及を目ざした画商や出版者の依頼により、画家たちは古典文学や同時代の詩人の作品などから原作を選び、あるいは自らテキストを書き、版画技法による挿絵を制作しました。

「芸術家による挿絵本」は、20世紀後半に写真印刷が版画を席捲し、芸術家が文学との対話や書物の形式にこだわらなくなったことから、衰退の途をたどりました。いまでは、20世紀前半のパリ画壇の隆盛と古き良きフランスの愛書文化を伝える、貴重な形式の芸術作品といえるでしょう。

Q. 絵本とはどちらがうの？

「芸術家による挿絵本」は、古くから存在する挿絵専門の職人や挿絵作家の手による挿絵入りの書物とは異なります。画家や彫刻家が下絵を制作し、その下絵をもとにした版画の制作過程は、腕利きの職人に任せられるか、もしくは版画技法を習得した芸術家自身が関わる場合もあります。数十部から約四百部程度の限定部数のもと、時には画家による自筆のサインが記され、紙、インク、活字、挿絵、ページレイアウト、表紙デザイン、版画技法にこだわった稀少な豪華本です。芸術家による挿絵本は、世界各国の美術愛好家や愛書家たちのコレクションに入り愛蔵されました。

Q. 展覧会で観られるのはどのような作品？

ポーラ美術館の挿絵本のコレクションは、書物も愛した美術品収集家であった、ポーラ創業家二代目の鈴木常司（すずき・つねし 1930-2000）が、美術作品のコレクションの一環として収集した作品群です。本展では挿絵本とともに、鈴木が収集した関連する絵画や彫刻も展示いたします。

Q. 「芸術家による挿絵本」の楽しみ方は？

本展で紹介する挿絵本は卓越した版画技法が用いられた版画作品であり、芸術家たちが生み出した絵画や彫刻に勝るとも劣らない傑作に数えられます。版画作品として鑑賞されるだけでなく、理想の書物を追究した芸術家たちが監修した文字と挿絵のレイアウトや表紙などのブックデザインもお楽しみいただけます。



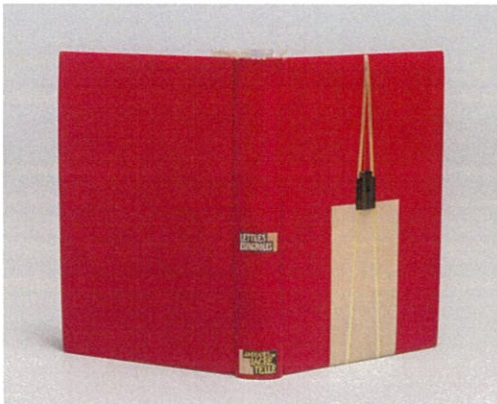
序章 『愛書家D氏の書斎へようこそ』

まずは古き良き挿絵本の殿堂へ。20世紀初頭の美術品コレクターで愛書家である紳士Dの書斎を再現したスペース『愛書家D氏の書斎へようこそ』を展示会の入口に設置し、来館者を挿絵本の世界に誘います。ルネサンス期以降の西洋諸国では、豊かな財力と教養を持つ人物が、自邸のサロンや書斎を洗練された知的空間として演出するため、美しい革の装幀を施した貴重書を書棚に架し、絵画や彫刻とともに壁を飾る慣習が浸透していきました。この再現スペースでは、芸術家による挿絵本が隆盛しはじめた20世紀初頭のフランスを代表する美術品コレクターで愛書家D氏の優雅で華麗な空間を体感していただけます。



コラム 1 「愛書家」と「装幀家」

あるじ
書斎の主D氏とは、パリで活躍した服飾メーカーの経営者で、名高い美術品収集家、稀覯本や手稿の収集家ジャック・ドゥーセ(1853-1929)をイメージしています。展示会のこのスペースでは、挿絵本とともに、ドゥーセが好んで収集したアンリ・ルソーのジャングルを描いた油彩画、パブロ・ピカソのキュビズム時代の重要作、マリー・ローランサンきこうぼんの装飾的な女性像が書斎の壁を飾ります。ドゥーセは収集した書籍や手稿を装飾デザイナーに装幀させました。ドゥーセ専属の女性の装幀家ローズ・アドレールによるアール・デコ様式の装幀本は、往時に愛書家たちが書物に注いだ情熱と、新進の装幀デザイナーによる大胆な革新を伝えています。

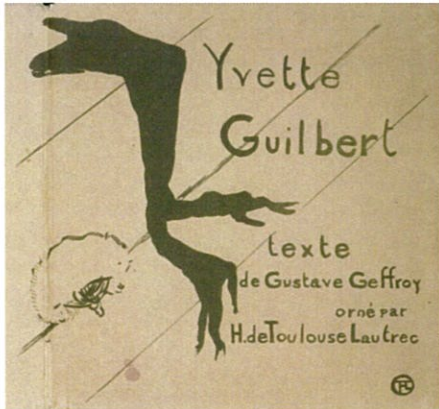


左から

マリー・ローランサン『スペイン便り』(ジャック・ド・ラクルテル著)表紙 1926年刊 装幀:ローズ・アドレール
アンリ・ルソー《エデンの園のエヴァ》1906-1910年頃 油彩/カンヴァス 46.5×61.4cm

第1章 ドガとトゥールーズ・ロートレック「本を編む」

芸術家が手掛ける挿絵本の始まりは、フランスでは19世紀にさかのぼります。印刷技術の発展にともない、文章(文字)と挿絵(図)の関係は、多くの画家たちによってさまざまに探究されていきました。このセクションでは、画家であり版画家でもあった19世紀のドガとトゥールーズ=ロートレックの作品をご紹介します。



左から

アンリ・ドゥールーズ=ロートレック『イヴェット・ギルベール』表紙 1894年刊 リトグラフ/紙 (前・後期展示)

挿絵原画:エドガー・ドガ『テリエ館』(ギイ・ド・モーバッサン著)、標題頁の挿絵 1934年刊 (前期展示)

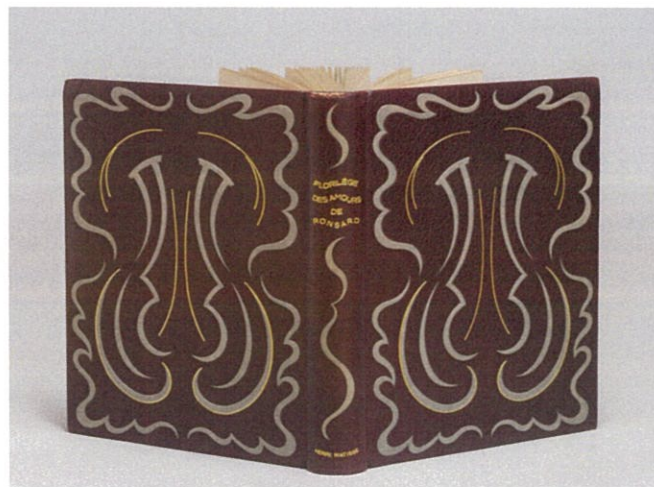
挿絵原画:エドガー・ドガ『ドガ・ダンス・デュッサン』(ポール・ヴァレリー著)、98頁の挿絵 1936年刊 (後期展示)

コラム 2 芸術家による「挿絵本」のかたち

紙のしなやかな質感が魅力の「未綴じ本」と、職人の伝統技法による豪華で華麗な「装幀本」

現在流通している書物は、接着剤や糸で本の背が綴じられた表紙と本文ページが一体化した製本済みのものです。本展覧会で紹介する芸術家による「挿絵本」には、印刷所や版画の工房で印刷された紙のページが、表紙の厚紙にはさんであるだけの「未綴じ本」が多くあります。

「未綴じ本」は、紙のページをめくって鑑賞するだけでなく、好みの図版のページを選び出して、額に入れて飾ることもできます。このような「未綴じ本」を、愛書家たちは、版画工房で刷られたばかりの状態でコレクションすることもあれば、装幀家に依頼して製本し、好みのデザインの装幀を施すこともあります。本展覧会では、「未綴じ本」や、モロッコ革の細工が美しい「装幀本」など、さまざまな本のかたちを愉しむことができます。また一部の挿絵本をデジタル・ブックでページをめくって鑑賞するコーナーも設置いたします。



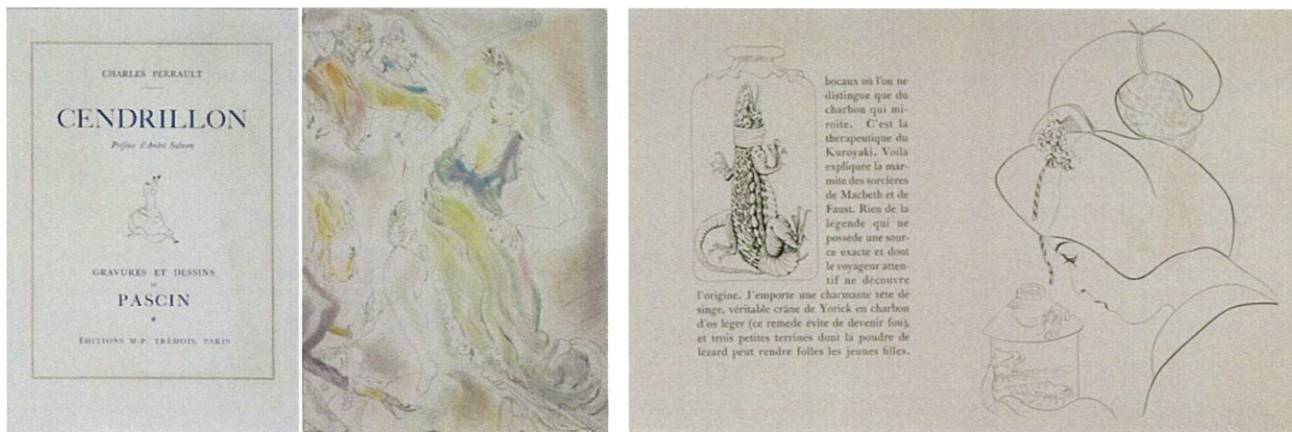
左から

【未綴じ本】アンリ・ドゥールーズ=ロートレック『イヴェット・ギルベール』(ギュスターヴ・ジェフロワ著)表紙 1894年刊 リトグラフ/紙

【装幀本】アンリ・マティス『愛の詞華集』(ピエール・ド・ロンサール著)表紙 1948年刊 装幀:マドレーヌ・グラ

第2章 パスキン、フジタ、ローランサン「挿絵を描く」

エコール・ド・パリの画家たち、フジタ、パスキン、ローランサンらは、1920年～30年代に数多くの挿絵本を手がけています。パリの文学界と交流し、舞台芸術にも関わった彼らは、それぞれ個性的なスタイルで繊細な線と色彩を用い、詩や物語にインスピレーションを受けて挿絵を描きました。彼らは、古典文学から同時代の文学まで幅広く対象とし、書物への情熱にあふれた挿絵本を世に送り出しています。



左から

ジュール・パスキン『サンドリヨン』(シャルル・ペロー著)表紙、挿絵 1929年刊 エッチング/紙 (前期展示)

レオナルド・フジタ『海龍』(ジャン・コクトー著)より 1955年刊 ビュラン/紙 (後期展示)

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014

D0697

第3章 シャガール「物語を彩る」

「リトグラフの石や銅板の板を手にする、私はそこに不思議な力を感じとるのだった。私の悲しみの全て、喜びの全てをその中におさめることができる、私はそう感じた」(シャガール)。

銅版画による重厚な明暗表現が冴えわたる『死せる魂』や、カラー・リトグラフによる華麗な色彩を巧みに操り、挿絵本の傑作とされる『ダフニスとクロエ』など、シャガールの代表作を厳選して公開します。



左から

マルク・シャガール《トランプ》『死せる魂』(ニコライ・ゴーゴリ著) 1948年刊 エッチング、ドライポイント、アクアティント/紙 (後期展示)

© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014, Chagall®

D0697

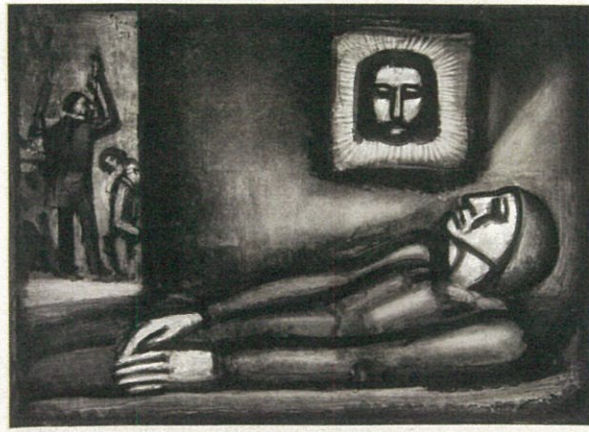
マルク・シャガール《牧場の春》『ダフニスとクロエ』(ロンゴス著) 1961年刊 リトグラフ/紙 (M.314) (前期展示)

© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014, Chagall®

D0697

第4章 ルオー「光を与える」

「信仰の画家」として知られるジョルジュ・ルオーは、版画や挿絵本の制作にも情熱を傾けました。第一次世界大戦を契機に、敬虔な信仰心を通じて戦争の悲劇を表現した『ミセレーレ』（憐れみたまえ）から、画家の憧れであったサーカス一座をとりあげた『流れる星のサーカス』まで、宗教的な主題をはじめとするルオーの様々な関心が向けられた版画表現をご覧ください。



左から

ジョルジュ・ルオー《神よ、われを憐れみたまえ、あなたの大きな慈しみによって》『ミセレーレ』1948年刊 エッチング/紙（後期展示）

ジョルジュ・ルオー《深き淵より…》『ミセレーレ』1948年刊 エッチング/紙（後期展示）

ジョルジュ・ルオー《アルチュール親方》『流れる星のサーカス』1938年刊 エッチング、木口木版/紙（前期展示）

© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014

D0697

第5章 ピカソ、ドラン、マイヨール「古典を旅する」

悠久の歴史をもつ古典文学は、読者はもちろん、画家たちの創意を刺激してやみませんでした。その仕事には、各々の文化的な出自や伝統に対する、憧憬と敬意にあふれるまなざしが息づいています。ここでは、ピカソ、ドラン、マイヨールの手がけた挿絵本に焦点を当て、それぞれの作家の古典と対峙する姿をご紹介します。



左から

アリスティド・マイヨール『愛の技法』（オウィディウス著）より 1935年刊（後期展示）

パブロ・ピカソ『20詩篇』（ルイス・デ・ゴンゴラ著）1948年刊 装幀：アンリ・クルーズヴォ（前・後期展示）

アンドレ・ドラン《パンタグリユエル》『パンタグリユエル物語』（フランソワ・ラブレール著）1943年刊（前期展示）

第6章 マティス、レジェ、ブラック「空間をひらく」

マティスは詩人マラルメの『詩集』に、銅版画の技法を用いて華麗な刻線を配する一方で、『ジャズ』では、切り紙絵の技法を応用したステンシルの技法で、色面の組み合わせによる無限の空間の広がりを実現しました。「サーカス」をテーマに自筆のテキストを添えた躍動感あふれるレジェの『サーカス』、鳥をモチーフに絵画における「詩＝ポエジー」について深い思索を重ねた晩年のブラックの挿絵本を紹介し、絵画空間を果敢に切りひらいたマティス、レジェ、ブラックの仕事に迫ります。



左から

アンリ・マティス《イカロス》『ジャズ』1947年刊 ステンシル/紙（後期展示）
フェルナン・レジェ『サーカス』表紙 1950年刊 リトグラフ/紙（前・後期展示）
ジョルジュ・ブラック『鳥の復活』表紙 1959年刊 リトグラフ/紙（前・後期展示）

APPENDIX SPACE マティスとJAZZセッション

マティスの『ジャズ』はどのように生み出されたのか…。

第6章でマティス『ジャズ』を鑑賞した後は、ロビーフロアに設置する“アペンディクス”（書物の付録）・スペースでちょっと一息。

マティスのアトリエをイメージしたくつろぎのスペースでは、本展覧会オリジナルのアニメーションとインタラクティブコンテンツを公開。マティスの『ジャズ』の制作過程を追体験し、マティスとあなたの即興による『JAZZ』セッションを行うことができます。大画面のタッチパネルで色を自由に選ぶと、その色に塗られた紙片が画面上で切り出され、紙のパーツがリズムカルに組み合わせられてあなたの『ジャズ』のコンポジションが完成します。



第7章 ミロ「宇宙を紡ぐ」

生涯にわたってダダ、シュルレアリスムなどの詩人たちと深く交流したミロは、絵画と文学とが渾然一体となった挿絵本を盛んに制作しました。木版から銅版、リトグラフ、さらにコラージュまで、さまざまな技法を用いてミロが紡ぎだす小宇宙を4点の挿絵本によりご紹介します。



左から

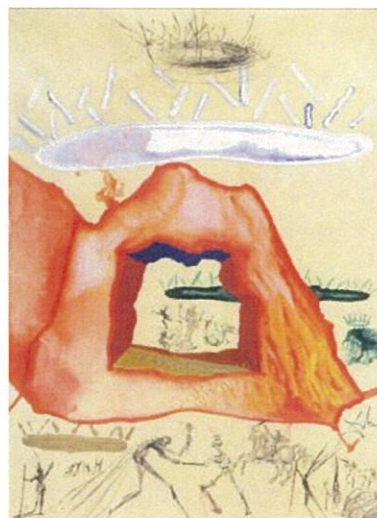
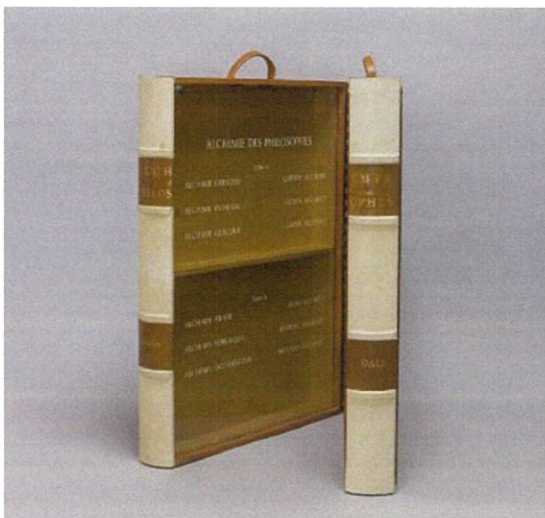
ジョアン・ミロ『あらゆる試みに』より（ポール・エリュアール著）1958年刊 木版／紙（前期展示）

ジョアン・ミロ『オーロラの指輪』（ルネ・クルヴェル著）、第1図 1957年刊 リトグラフ、アクアティント／紙（前期展示）

© Successió Miró-Adagp, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014
D0697

第8章 ダリ「世界を創る」

ダリもまたシュルレアリスムの詩人たちと深く交流し、書物の制作を盛んに行いました。『哲学者の錬金術』は、10点の版画とともに、各国の錬金術に関する古文書の写しをまとめた2巻の冊子を、本をかたどった大きな箱に収めた作品です。神が世界を創造した過程を再現する技法と言われる錬金術に魅せられた、ダリの芸術をご紹介します。



左から

サルバドール・ダリ『哲学者の錬金術』外箱 1976年（前・後期展示）

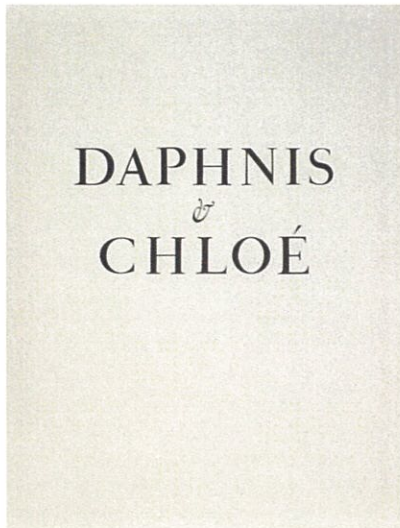
サルバドール・ダリ『哲学者の坩堝』『哲学者の錬金術』1976年 ドライポイント、エッチング、リトグラフ、シルクスクリーン／羊皮紙（前期展示）

© Salvador Dalí, Fundació Gala-Salvador Dalí, JASPAR Tokyo, 2014
D0697

作品解説—世界でもっとも美しい3冊の挿絵本。

シャガール『ダフニスとクロエ』

—芸術家（アーティスト）と職人（アルティザン）の競演によるカラー・リトグラフの最高傑作



マルク・シャガール 《屏絵 ダフニスとクロエ》『ダフニスとクロエ』（ロンゴス著）1961年刊 リトグラフ/紙（M.308）（前期展示）
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014, Chagall®
D0697

色彩の魔術師と称賛されるシャガールは、第二次世界大戦後、リトグラフの名手フェルナン・ムルロの版画工房と協働して数々の傑作を生み出しています。『ダフニスとクロエ』は、エーゲ海に浮かぶレスボス島出身の出版者テリアードからの同名の原作の古代ギリシアの作家ロンゴスによる挿絵本制作の依頼によるもので、シャガールは二度にわたるギリシア取材を重ねて制作しました。ギリシアの神話的な輝きを表現するために、本作品にはリトグラフとしては例外的に20色以上の色彩が用いられ、完成には4年以上の歳月が費やされました。カラー・リトグラフの絢爛たる色彩の効果を最大限に生かし、自然豊かなレスボス島を舞台に繰り広げられる少年ダフニスと少女クロエの恋の物語が、抒情豊かに綴られています。

マチス『ジャズ』—切り紙絵の小宇宙から生まれた芸術の革新

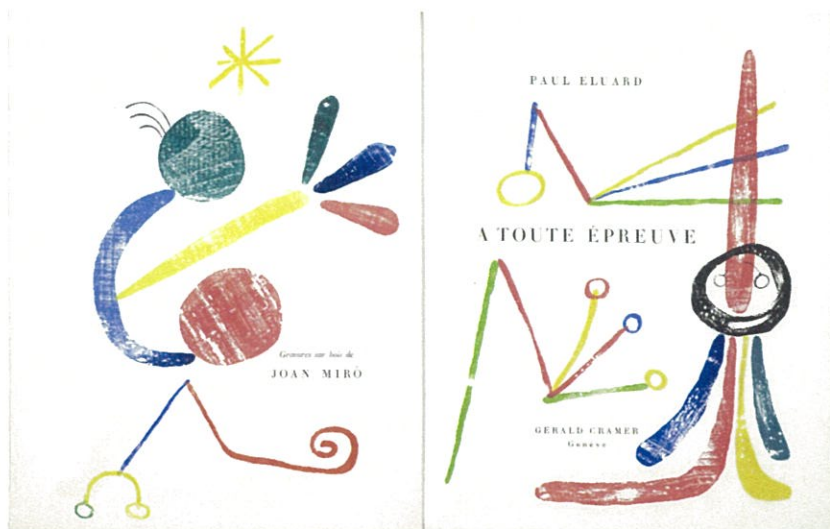


アンリ・マチス 《道化師》『ジャズ』1947年刊 ステンシル/紙（前期展示）

マチスは生涯で48点の挿絵本を手がけていますが、大胆な技法を用いた挿絵と自筆のテキストを組み合わせた『ジャズ』は、1942年の着手から1947年の完成まで多大な年月を要した大プロジェクトでした。切り紙絵とは、はさみを操り、絵具をあらかじめ塗った紙から形を切り出すマチス独自の技法です。晩年のマチスは大病を患い体力を失ったため、1941年頃から体への負担が少ない切り紙絵に制作の自由と可能性を見出しました。切り紙絵の構図が決定すると、紙のパーツはアトリエの壁に次々とピンで留められて集積されるので、マチスは常におびたどしい数の色彩の紙片に囲まれていました。晩年の彼のアトリエは、色とりどりの紙片の小宇宙となり、そこから『ジャズ』のイメージも抽出されたのです。この切り紙絵の原画をもとにした挿絵本『ジャズ』は、紙製のステンシルの版で刷られています。それぞれの図版は抽象的な形とあざやかな色面で構成された図版の数々は、音楽的なリズムを響かせています。

ミロ『あらゆる試みに』

一人間の存在と星に魅せられた画家と詩人が紡ぎだした星座



ジョアン・ミロ『あらゆる試みに』より 1958年刊
木版/紙 32.5×50.3cm (前期展示)
© Successió Miró-Adagp, Paris & JASPAR,
Tokyo, 2014

『あらゆる試みに』は、詩人のポール・エリュアールが、ミロの故郷スペインのカタルーニャ地方を訪れた思い出に基づき創作した詩集『あらゆる試みに』を原作とした、詩人と画家の共作です。ミロは、1919年にパリに赴き、ダリ、ブルトン、エリュアールらと、絵画と文学のジャンルを超えて「シュルレアリスム」(超現実主義)を推し進めました。シュルレアリスムの詩人たちは、心のおもむくままに筆を走らせる「オートマティスム」(自動記述)の方法で無意識の世界を探究し、不可思議で混沌とした宇宙を文字によって創造します。ミロもまた、人間、鳥、天体といったモチーフを単純化して記号のように表わし、それらが自由に連関して一篇の詩を奏でる絵画を描きました。本作品では木版やコラージュなど、試作から出版まで10年の月日をかけて創りあげられたミロの版画におけるあらゆる試みにより、絵画と詩の融合が実現されています。

コラム 3 「絵画」と「書物」との出逢いーイメージとテキストの対話 「挿絵本」という出逢いのプロデューサー

20世紀初頭に「芸術家による挿絵本」の刊行をプロデュースしたのは、画商や出版者です。セザンヌの画商として名高いアンブロワーズ・ヴォラール(1867-1939)は、「芸術家による挿絵本」という新ジャンルを生み出し、画家たちに挿絵本制作の依頼をして、ボナール、ピカソ、ルオー、シャガール、ブラックら多くの画家たちを書物の制作に巻き込んでいきました。本展の出品作にもヴォラールが手がけた9点の挿絵本が含まれています。

出版者からの依頼を受けて、芸術家たちは挿絵本の原作を選び、テキストを読み解き、インスピレーションを受けてイメージを醸成し、自らの創作物として挿絵を制作しました。芸術家たちと原作のテキストとの関わりはさまざまです。おとぎ話のヒロインを軽妙に彩ったパスキンの『サンドリヨン』(シンデレラ)や、ローランサン『不思議の国のアリス』、ミロとエリュアールによる、画家と詩人の共作『あらゆる試みに』、図版に合わせて芸術論も執筆し、自らのマニフェストの書としたマティス『ジャズ』、レジェ『サーカス』、ブラック『弓』など、芸術家たちが書物の形式において追究した、理想的なイメージとテキストの対話をご覧ください。